

原民喜『ガリバー旅行記』の「アンポニア」と
「ヤーフ」、Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* の
“Amboyna” と “Yahoo” について

山内 暁彦

“Anponia” and “Yā-hu” in *Garibā Ryokouki* by HARA Tamiki
and “the Amboyna” and “Yahoos” in *Gulliver's Travels* by
Jonathan Swift

YAMAUCHI Akihiko

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第 29 巻 別刷 2021 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
Tokushima University
Volume XXIX, December 2021

原民喜『ガリバー旅行記』の「アンボニア」と
「ヤーフ」、Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*
の“Amboyna”と“Yahoo”について

山内 暁彦

“Anponia” and “Yā-hu” in *Garibā Ryokouki* by HARA
Tamiki and “the *Amboyna*” and “Yahoos” in *Gulliver's*
Travels by Jonathan Swift

YAMAUCHI Akihiko

Abstract

This essay examines *Garibā Ryokouki* by HARA Tamiki (原民喜), a retelling of *Gulliver's Travels* by Jonathan Swift. Two proper nouns stand out in the translation: “Anponia (アンボニア)” and “Yā-hu (ヤーフ).” The reason why “the *Amboyna*” is written as “Anponia” instead of “Anboina (アンボイナ)” should be “anpontan (アンボンタン)” that means a stupid person. The reason why “Yahoo” was changed to “Yā-hu (ヤーフ)” not “Ya-hū (ヤフー)” must be “ya-hu (野夫)” that means a rude man. Both changes imply the stupidity of man in general. HARA Tamiki made these changes to evoke words that were familiar to his Japanese readers at the time of its publication in 1951. These changes are not faults, but points to be appreciated. They are examples of HARA Tamiki's ingenuity in translating a foreign literary work into his own language, regardless of whether or not he came up with the two words: “Anponia (アンボニア)” and “Yā-hu (ヤーフ).”

序

本論では、ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の『ガリヴァー旅行記』 *Gulliver's Travels* (1726) の再話である、原民喜 (1905-1951) の『ガリバー旅行記』 (主婦の友社、昭和 26 年、1951 年) 中のいくつかの固有名詞の表記に関わる問題点を取り上げる。¹ この再話では、*Gulliver's Travels* の日本語への翻訳において、いろいろな変更が加えられている。それは物語の輪郭だけでなく、個々の固有名詞にまで及んでいる。例えば、ガリヴァーが日本からオランダに渡る時に乗った船で、普通は「アンボイナ号」という字を当てられる “the *Amboyna*” も「アンボニア号」と、後半が変えられている。また、通常は「ヤフー」と表記される “Yahoo” が、どういうわけか「ヤーフ」と表記されている。これらは単なる誤記や誤植、あるいは原民喜の不注意や気まぐれによる表記の変更ではないのではないか。原民喜は、意図的に「アンボニア」や「ヤーフ」という表記をしているのではないか。原民喜の『ガリバー旅行記』が一義的には子供向けの再話であることを越えて、彼は大人にもこの作品を届けようとしたのではないかとこの想定のもと、「アンボニア」と「ヤーフ」をはじめとする、作品中の固有名詞が日本語に訳された際に見られる、さまざまな特徴的な表記に着目しつつ、原民喜が『ガリバー旅行記』という再話に込めた真の意図を考察する。その際、*Gulliver's Travels* が原民喜の再話に先立って日本語に翻訳された場合の表記の異同に注意していく。これまでに日本語訳においては、“Yahoo” は「ヤフー」「ヤフウ」、「Houyhnhnm」は「フウイヌム」「フイヌム」「フーインム」など、“Gulliver” は「ガリヴァー」「ガリバー」「ガリバア」などと、様々な表記がなされてきた。本論の地の文においては「ヤフー」「フウイヌム」「ガリヴァー」とするが、個別の翻訳作品での表記は原文を尊重して統一はしない。一部やむを得ず現代風に改めたものを除き、旧漢字旧仮名遣いは原文のものを尊重する。

¹ 本論で扱う各種の和書の出版年は、明治、大正、昭和、平成に及ぶため、換算の手間を省く便宜上、このように和暦と西暦を併記する。「昭和 26 (1951) 年」とはせず、それぞれに「年」を付け「昭和 26 年、1951 年」のように記す。

I

原民喜の『ガリバー旅行記』は、現在では講談社文芸文庫版（平成 7 年、1995 年）があるだけでなく、インターネット上の「青空文庫」にもデータとして収められており、誰もが手軽に読むことができる。² ここで、「誰もが」と述べたのは、この場合多くは「大人が」ということである。しかし、この翻訳は、その平易で分かり易い文体から考えても、初めは主婦の友社から「少年少女名作家庭文庫」の 1 冊（第 5 巻）として出版されたことから分かるように、一見すると、子供向けに書かれたものであることは間違いない。初版は昭和 26 年、1951 年の 6 月に出た。原民樹の自死の 3 ヶ月後であった。講談社文芸文庫版の巻末に収められた「解説 フウイヌムの視線」を川西正明はこう始めている。

原民喜はいつごろから「ガリバー旅行記」童話化にとりかかったのだろうか。佐々木基一が元気なうちに聞いておけばよかったものを聞かずにすませてしまったものだから、後の祭りである。ただいくつかのがかりがあるので、推論してみよう。（227 頁）

この「解説」を一読して、カナ表記が非常に多いことに気づく。³ そのことと機を一にして原民喜の『ガリバー旅行記』を「童話化」と川西正明は称していることに注意したい。彼の意識では、この再話は童話化であるということだ。この考え方は長田弘も同様である。以下は川西正明の「解説」の後段の部分であり、そこに長田弘についての言及がある。

原民喜が決別して去っていった戦後の時間と空間のなかに私なども取り残されたのだ。その取り残される後の時代の子供たちへのおくりもの

² ジョナサン・スウィフト、原民喜訳『ガリバー旅行記』（青空文庫）
<https://www.aozora.gr.jp/cards/000912/files/4673_9768.html>（2021 年 11 月 30 日閲覧）

³ 本論では、平仮名の表記、片仮名の表記をまとめて「カナ表記」と記す。

の本として、「夏の花」の作者はこの「ガリバー旅行記」を残しておきたかったのだと長田弘はいう。(235 頁)

この引用箇所の後、川西正明の「解説」では、長田弘の文章が紹介されている。紹介された文章中には「子供たちへのおくりもの」云々の文言はなく、「フウイヌム・ユートピア」の考察から、有名な「パット剥ギトッテシマッタアトノセカイ」という「夏の花」の中の有名な言葉へと、なだらかに文章は続いている。してみると、子供たちへのおくりものとしての再話、すなわち「童話化」の件は、長田弘の考えではなく、むしろ川西正明自身の考えを表明した、一種の言葉のあやではないかと思えてくる。悪く言えばでっち上げ(捏造)である。そこで、川西正明の名誉のためにも、我々は、長田弘の元の文章、すなわち、晶文社版『ガリバー旅行記』(昭和 52 年、1977 年)の「解説」自体に当たる他はないことになる。⁴

晶文社版『ガリバー旅行記』は「ものがたり図書館」という叢書に入っていて、その第 1 巻である。正式なタイトルは『原民喜のガリバー旅行記』である。『スウィフトのガリバー旅行記』ではないことにまずは注意すべきである。これはあくまでも原民喜による再話であるということが、書物の表題で表明されているということであるのだ。その巻末には長田弘による「解説」が付されている。その 224 頁に我々の探し求めていた文言はある。当該の箇所を、その少し前から引用しよう。

ガリバーを書いていた原民喜には、つぶすべき時間はすでにのこされていなかったし、スウィフトのガリバー旅行記は、原民喜というひとりの作家にとって決定的な意味をもった物語だった。むしろガリバーの物語をこそ、『夏の花』の作家は後の時代の子どもたちへのおくりものの本として、あらためてじぶんの手で死後にのこしておきたかったのだ。わたしはそうとかんがえたい。(224 頁)

⁴ 主婦の友社版の『ガリバー旅行記』には「解説」はなく、原民喜自身の「あとがき」があるだけである。この「あとがき」は、講談社文芸文庫版「著者から読者へに代えて」の中に収められている。(217-20 頁)

カナ表記の多用が、この文章の特徴であるが、先の川西正明の文章の特徴と全く同じ趣きである。ところで、筆者はカナの多用をあまり高く評価していない。なぜなら、せっかく言葉の意味を担う漢字があるのにも関わらず、多くをカナに置き換えてしまうことで音だけが残され、肝心の意味が不明瞭になってしまいうからである。子供達にとって漢字は難しいかも知れないが、ある程度の年齢であれば漢字を使った文章を理解して欲しいものである。このことは、新聞、雑誌、書籍など、さまざまな印刷物で「ルビ」を使わなくなってしまったことと関係があるのだが、これはまた別の問題である。

さて、長田の「解説」と川西の「解説」との関わりに話を戻せば、結局のところ我々が持った、捏造の疑いは晴れたことになるであろう。問題は、引用の仕方が非常に誤解を生じやすい形になっていたということである。長田の元の文は以下のようにになっていた。

むしろガリバーの物語をこそ、『夏の花』の作家は後の時代の子どもたちへのおくりものの本として、あらためてじぶんの手で死後にのこしておきたかったのだ。（224 頁）

一方、川西による「引用」ではこのようにされている。

その取り残される後の時代の子供たちへのおくりものの本として、「夏の花」の作者はこの「ガリバー旅行記」を残しておきたかったのだと長田弘はいう。（235 頁）

この例はいわゆるパラフレーズであり、趣旨は大体通じるので、引用の仕方としては、筆者の基準ではかろうじて許容範囲に入るものではある。しかし、川西には、もっと原文を尊重し、改変せずに引用して欲しかった。その結果はおそらくこういう形になるであろう。

長田弘は次のように述べている。「むしろガリバーの物語をこそ、『夏

の花』の作家は後の時代の子どもたちへのおくりものの本として、あらためてじぶんの手で死後にのこしておきたかったのだ」と。

このようにすれば、原文をしっかりと尊重したことになるだけでなく、川西で「夏の花」と只のカギ括弧になってしまっていた点も、『夏の花』と二重カギ括弧を使用することで、短編としての「夏の花」ではなく、作品集『夏の花』を表すのに適切な形にすることもできた。我々のように学問に携わる者は引用の方法に厳密であろうとするが、以上に述べたことは一般の読者から見れば妙な言いがかりに見えるかも知れない。しかしながら、研究論文やレポートではない、一文庫本の単なる「解説」であるとはいえ、定評ある講談社文芸文庫に「解説」を載せるということであれば、こうした厳密さへの配慮もあって然るべきではないだろうか。もちろん、これは講談社だけの責任とは言えない。この文庫版の底本は、青土社刊『定本原民喜全集Ⅱ』（昭和53年、1978年）であるからだ。些細な不具合が、たまたま受け継がれてしまったということに過ぎない。

少し長くなってしまったが、このようなことを述べたのには理由がある。「解説」は基本的には大人の読者向けのもので、（賢い子供を除いて）多くの子供にはあまり関係ない。一方、元の作品である原民喜の『ガリバー旅行記』は、一応基本的には子供向けと考えて良い。ただし、子供向けといっても、実は大人もしっかり含まれるものである、という筆者の考えを述べるための、これは一種の前置きとして受け取っていただきたい。

一見すると子供向けに書かれているように見える『ガリバー旅行記』を、実は原民喜は、大人の読者を想定しつつ書いたのではないだろうか。そのことが表れているのが「アンボニア」と「ヤーフ」という、珍しい表記である。すなわち、原民喜は意図的にこのような変則的な表記を用いているのではないか、ということなのである。この2つの表記がともに作品の後半部分に現れていることにも意味があるだろう。大筋、作品の前半（リリパット渡航記やブロボディンナグ渡航記）は、子供にも理解できるものであるのに対し、後半になればなるほど、作品の風刺は全体として明らかに 大人向けの様相を呈してくるからだ。

II

では、ここからは「アンボニア」や「ヤーフ」をはじめとする様々な固有名詞が、他の多くの版本における表記とは異なっている独特のものであるということ詳しく見ていくこととしよう。使用するテキストは、もっぱら講談社文芸文庫版による。まず初めに、原民喜の『ガリバー旅行記』の中には、「アンボニア」や「ヤーフ」だけでなく、これら以外の固有名詞の表記においても数々の独特なカナ表記が見られることをここで確認しておきたい。表記がかなり異なっている理由は、この本の初版が文学書の出版に特化しているとは言い難い主婦の友社という書店から出たことや、晩年に心身の不調を多く抱えていた原民喜自身が注意力を欠いていたこと、推敲や校正に十分な時間と気力をかけられなかったこと等の要因があるかも知れない。だが、こうした外的な事情は今は一旦度外視し、一つの作品として我々の目の前にあるものを虚心坦懐に見ていこう。

カナ表記された固有名詞のうちで、原民喜の独自性が出ていると思われるものはいくつもあるのだが、それらは、大きく2種類に分けられる。一つは、特別な意図の感じられないもの、もう一つは、何らかの意図が感じられるものである。まずは、特に意図的ではないと思われるものから順に見ていこう。

1) 71 頁（「大人国」冒頭）、216 頁（「馬の国」末尾）の「ダウンス」

この地名は、スウィフトの原文では “Downs” である。普通は「ダウنز」だが、「ズ」の濁点がなく「ス」になっている。ところが、176 頁（「飛島（ラピュタ）」の末尾）では正しく「ダウنز」となっている。2 種類の表記があるのだが、これは何ら意図的ではないようである。恐らく単なる誤記か誤植であろう。英語の発音では、/s/ と /z/ の差は、日本語の「ス」と「ズ」の差ほど大きくないから、いずれにせよこれは大きな問題ではないと考えられる。

2) 161 頁の「マルドナーダー」

この地名は原文では “Maldonada” である。バルニバービの港町である。普通は「マルドナーダ」だろうが、原民喜訳では末尾に長音「ー」がついている。直近の 160 頁以降に「アレキサンダー」「シーザー」「ホーマー」と、長音「ー」

で終わる語が頻出したせいで影響されたのだろうか。少し前の 156 頁では、通例のように「マルドナーダ」となっている。これも単なる誤記・誤植レベルであるだろう。この地名は、長音をなくして、単に「マルドナダ」などとしても良いので、この場合も大きな問題ではないと考えられる。

3) 176 頁（「飛島（ラピュタ）」の末尾）の「レドリック」

このイギリスの地名は原文では“Redriff”である。普通は「レドリフ」や「レドリ」だが、語尾の「フ」が「ク」になってしまっているので少し具合が悪い。これも単なる誤記・誤植であろうか。そうでないとなると、原民喜が自分の翻訳を作る際に、先行する翻訳を参考のために見たと仮定すれば、原民喜の見た翻訳で「フ」が「ク」になっていた、ということもありそうである。あるいはその時に「フ」を「ク」に見間違ったか。あるいはこれも先の例と同様に単なる誤記か誤植と見なして良いだろう。語尾の「フ」が「ク」になった原因は不詳だが、「レドリック」だろうが「レドリフ」だろうが、大した違いはないようにも思える。あえて語尾の「フ」を「ク」に変えているとしても、その理由は不明である。世の中には「セドリック（Cedric）」という人名はあるが、地名をわざわざ人名に近づけたとも思えない。

以上の 3 例については、結局のところ、何らかのはっきりした意図があって改変されているようではない。むしろ、いずれも誤記・誤植のレベルにとどまるのではないかというのが筆者の意見である。

ところが、これらとは異なり、原民喜が明らかに意図的に改変していると思われるのが「アンボニア」と「ヤーフ」の 2 件である。まず初めに「アンボニア」を詳しく見ていこう。この船の名称はスウィフトの原作では“the *Amboyne*”である。日本語訳では普通は「アンボイナ号」と表記されるはずだが、「ボ」が「ポ」に、「イナ」が「ニア」に変えられているのだ。

一七〇九年六月九日、長い旅のあげく、ようやくナンガサクに着きました。私はすぐそこで、『アンボニア号』という船の、オランダ人の水夫たちと知り合いになりました。（175 頁）

スウィフトの原作ではガリヴァーは、オランダ船「アンボイナ号」に乗せても

らい、ジャパンからオランダを経由してイギリスに戻って行くのであるが、この船の名前自体にスウィフトの風刺の意図が込められているということはよく知られている。ごく簡単にいえば、いわゆる「アンボイナ事件」あるいは「アンボイナ虐殺」(the Amboyna massacre)を想起させて、オランダ(人)がいかに悪いかという感情を読者に呼び起こすための風刺的な意図が込められているということである。⁵ さらには、その悪いオランダ人と仲良くなるガリヴァーとは一体何者か、との疑念をも読者に抱かせる、凝った構造になっているのである。よって、「アンボイナ」はあくまでも「アンボイナ」としておきたいところなのだ。したがって、これを『アンボニア号』と(それもわざわざ二重カギ括弧付きに)変えてあるのは、単なる誤記や誤植ではないだろう、というのが筆者の考えなのである。ここで、参考のためスウィフトの原文を引用しておく。翻訳よりは少し長い。Cambridge 版の全集から取る。

On the 9th Day of *June*, 1709, I arrived at *Nangasac*, after a very long and troublesome Journey. I soon fell into Company of some *Dutch* Sailors belonging to the *Amboyna* of *Amsterdam*, a stout Ship of 450 Tuns.⁶

この原文と翻訳とを比較すれば、翻訳は少し縮約されているものの、全体的には正しく訳されているのが分かるだろう。果たして原民喜はどのような原書を用いて翻訳したのであろうか。このことは今後研究の余地がある点である。

原民喜は自分の再話を書く際に、先行する訳書を参考のため見たかどうかを少し問題にした。それは、どんな訳者についても当てはまるように、先行する翻訳があれば手に取ってみたいくなるものであるからだ。原民喜もおそらくそうしたのでないか。そこで、改めて過去に何十種類も出版された *Gulliver's*

⁵ 詳しくは、原田範行、服部典之、武田正明著『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈 [注釈篇]』(岩波書店、2013年)396頁(注番号229-13)などを参照。

⁶ Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, ed. David Womersley, The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, 16 (Cambridge UP, 2012), 325.
以下、スウィフトの原文からの引用はこの版により、ページ数を末尾に記す。

Travels の翻訳の中で、原民喜以前に「アンボニア号」という語を使用している版がないかどうか確認してみたい。この場合、インターネットの「国立国会図書館デジタルコレクション」の中で公開されているものを閲覧していく仕方が非常に便利だ。⁷ 画面の拡大縮小や、ページめくりなど、使い勝手が良くない面はあるが、慣れれば問題ない。そして、座右には、松菱多津男の労作『邦訳「ガリヴァー旅行記」書誌目録』（春風社、平成 23 年、2011 年）を置きながらである。この目録には、これまでに日本語によって出版された、『ガリヴァー旅行記』の書誌情報（収録されているの種類、訳者や註釈者、挿絵画家、発行所、出版年月日、その他の細目）が、年代順に列挙されている。本の内容に関するコメントや論評は一切抜きだが、それは致し方ないだろう。それぞれの書目には通し番号が振られているので、以下それも付記する。

すると「デジタルコレクション」の中に、原民喜と同じ「アンボニア」という表記をしている版本に 1 冊出会うことができた。後述するが、筆者の手元のパソコンで見たのではなく、本学の附属図書館の端末で見たものである。それは、ほぼ同時期に出た、高嶺深雪訳の『ガリバー旅行記』（東光出版社、昭和 26 年、1951 年）である。その「三 空飛ぶ島からラグナグへ」の末尾から引用する。文中の「ナンがサキエ」は誤記・誤植であるが、そのままにしておく。

ながいながい旅と、さまざまな苦勞のすえ、わたくしはやつとナンがサキエつきました。一七〇九年六月六日のことでした。すると、オランダのアムステルダムで、船で、「アンボニア」號という四百五十トンばかりの船が港にはいました。わたくしはさつそくその船の水夫たちと友だちになりました。（126 頁、下段）⁸

⁷ 国立国会図書館デジタルコレクション <<https://dl.ndl.go.jp>>（2021 年 11 月 30 日閲覧）以下では単に「デジタルコレクション」と記す。

⁸ <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1633636>>（2021 年 11 月 22 日閲覧）この URL の高嶺深雪訳『ガリバー旅行記』は、奥付が本のページには印刷されておらず、代わりに紙が貼られている。書名を欠いたもので、昭和 32 年 10 月 15 日印刷、昭和 32 年 10 月 20 日発行となっている。同じシリーズに入っているどの作品にも同じ紙が貼られているらしい。（シリーズの中身は、1『宝島』、2『ロビンフッド』、3『鉄仮面』、4『ロビンソン漂流記』、5『ガリバー

この版本の出版年は、上記のように、昭和 26 年、1951 年である。さらに出版の月は松菱の目録（141 番）では、1 月となっている。したがって、原民喜が自らの再話を執筆中に高嶺深雪の『ガリバー旅行記』を閲読し、その中の表記を自分の再話に取り入れた可能性がある。というのは、原民喜が自死したのが、昭和 26 年、1951 年 3 月 13 日であったからである。この約 2 ヶ月という期間には書籍の出版、すなわち、原稿の執筆から、校正、印刷を経ての発行、店頭での販売に至るプロセスを考えた時、非常に微妙な長さであると思えるが、これ以上のことは何とも言い難い。

また、同時期に出た中野好夫による翻訳も、オランダ船の名前の点では興味深い。『続 ガリヴァー旅行記』は、岩波少年文庫の 1 冊（10）であり、表題からわかるように、原作の第 3 篇と第 4 篇が収められている。これもいわゆる再話であり、その初版は昭和 26 年、1951 年なのだ。松菱の目録では 148 番である。以下に当該箇所を引用する。

一七〇九年六月九日、私はたいへん長いなんぎな旅ののちに、「アンボニア」号という四百五十トンばかりの船に乗っている、オランダ人水夫に出会いました。（115 頁）

このように、中野好夫の訳では「アンボニア」となっていて、原民喜や高嶺深雪の「アンボニア」と非常に近い。濁点と半濁点の違いであるに過ぎず、一見全く同じに見えるものである。ただし、ここで注意しなければならないのは、この版本の出版は、松菱の目録によれば 5 月であり、原民喜の死後であるから、中野好夫のこの本からの原民喜への影響はないと考えられる。むしろその逆で

旅行記』、6『家なき児』、7『三銃士』、である。以上は 6 の巻末の広告による）これらの、奥付が印刷されていない版本は、おそらく国立国会図書館に納入するために、市販本とは別に印刷製本されたものであろう。そうであれば内容は同じはずである。松菱の目録（148 番）の版は市販本で、その日付は 1951 年、昭和 26 年であるが、内容はこの URL のものと同じであると思われる。また、『ガリバー旅行記』は 5 であるはずだが、どういう訳かこの URL での巻号の表示は 2 となっている。

あろうかと一瞬思われたが、そうでもないようだ。なぜなら、原民樹の『ガリバー旅行記』は死後出版であり、それが出たのが6月だからだ。このように調べてみて分かることであるが、相互の影響関係を論じるのは非常に面倒なことであるようだ。それはともかく、ここまでで、一応、原民樹と中野好夫の影響関係はなさそうであること、残る可能性としては、出版が最も早い高嶺深雪からこの両者に影響があったのではないかという推測ができるのである。

しかしながら、年代を少しさかのぼり、昭和15年、1940年に出た中野好夫の（松菱の目録では85番）『ガリヴァ旅行記（下）』（弘文堂書房）に、興味深いことに「『アンボニア』號」という表記があることが分かった。

一七〇九年六月九日、我輩は長い長い旅と、様々な難渋の揚句、やつとナンガサクに着いた。で直にアムステルダムの船で『アンボニア』號といふ四五〇噸ばかりの船のオランダ人水夫の一團と仲間になった。（89-90頁）

「アンボニア」という表記だけでなく、二重カギ括弧の使用も見られるので、どうやら原民喜が翻訳の作業中に見た参考書はこれであるような印象が強い。先ほどの岩波少年文庫版は、彼の死の直前であったので微妙だったのだが、この弘文堂書店版なら（妙な言い方だが）時に余裕がある。しかし残る問題はやはり「アンボニア」と「アンボニア」の、半濁点と濁点の違いである。また、細かい違いではあるが、二重カギ括弧の閉じる位置も両者で異なっている。さて、これらを一体どう判断したものだろうか。結論は出ずじまいであるが、中野好夫による弘文堂書房版の翻訳が、参考書としてかなり高い可能性を持っているということだけはここで述べておきたい。

もっとも、原民喜が参考にした書物は、中野好夫や高嶺深雪の翻訳ではなかった可能性もある。何か別の、第三の版本に「アンボニア」ないし「アンボニア」という表記があって、原民喜、高嶺深雪、中野好夫が、それぞれ別々に同じような表記を採用した、という可能性も残されている。しかし、残念ながら、現状ではそのような第三の翻訳は目にすることはできていない。また、翻訳ではなく、*Gulliver's Travels* の紹介や解説が掲載されている様々な本や雑誌、教

科書などの中に「アンボニア」という表記があったかも知れない。そう考えて、本論で後述する「ヤーフ」の表記を調べながら「アンボニア」や「アンボニア」がないかどうかにも注意を払ったのであるが、発見することはできなかった。さらに言えば、原民喜が翻訳に用いた原書が何であれ、それ自体、元の英語の表記が間違っていた、などということもあり得るだろう。このような可能性も含めて今後の検討課題としたい。

当面、*Gulliver's Travels* の翻訳に限って言えば、原民喜に先行する種々の翻訳において、「アンボニア」という表記に関しては、高嶺深雪の『ガリバー旅行記』を除いて一切なく、大変似通ってはいる（少しだけ異なっている）「アンボニア」については、中野好夫の『ガリヴァー旅行記（下）』と『続 ガリヴァー旅行記』以外にないということである。このように「アンボニア」という表記の数が極めて少ないことの要因は、*Gulliver's Travels* の翻訳において、第3篇までをもしっかり翻訳している版本が非常に限られていることも大いに影響しているだろう。残念なことであるが、第3篇、第4篇も含めた作品の全体がしっかり訳されることは少ない。仮に、作品の後半部分である第3篇、第4篇が訳されていても、それは全訳ではなく、抄訳や再話になってしまうということも多々あるのだ。その場合、原作ではたった一度言及されるに過ぎない船の名前までは訳されずに、「オランダの船」あるいは単に「船」などと簡単に済まされる場合も多い。その点、今我々が扱っている原民喜の『ガリバー旅行記』に関して言えば、それがたとえ原文の通りの「アンボイナ」にはなっていないなくとも、船の名前を「アンボニア号」としっかり訳してあることは、比較的珍しいことであると言えるだろう。その点は、高嶺深雪や中野好夫についても同様である。

これらの3冊に対して、ほぼ同じ時期に出た *Gulliver's Travels* の翻訳である以下のものでは、オランダ船の固有名詞を欠いてしまっている。一つは、那須辰造訳『ガリバー旅行記』（講談社、昭和26年、1951年）である。これは、世界名作全集（12）で、松菱の目録の143番である。この版本では、主な登場人物（馬やヤフーも含む「人物」）が、イラスト付きの短い文章で説明されていて、子供向けの版本としての配慮が行き届いている。また、各章の表題も、「リリパット國あやうし」「きみょうきてれつな人間ども」「馬がものをいう

ではないか」など、極めてユーモラスである。ただし、船の名前は書かれていない。⁹

今一つは、小沼丹著『ガリヴァ旅行記』（小峰書店、昭和 26 年、1951 年）である。少年少女のための世界文学選（4）である。松菱の目録では 144 番だ。これは第 1 篇から第 4 篇までが訳されてはいるものの、かなり縮約された再話であるため、当該の箇所も軽く流されてしまっていて、船の名まではやはり言及されていない。

一七〇九年六月九日、僕は長いやっかいな旅のちにナンガサクについた。そこでオランダ人の水夫の仲間になった。・・・そしてオランダ人になりすまし、船医として船に乗りこませてもらった。（144-45 頁）¹⁰

この引用では分かりづらいが、第 3 篇の末尾は単なる梗概のようになってしまっている。一口に再話と言っても、省略の程度は様々なのである。

ところで、原民喜の『ガリバー旅行記』が、今では講談社文芸文庫や、ネットの「青空文庫」で読めるのに対し、高嶺深雪や那須辰造、小沼丹の翻訳がなかなか読めないのは残念なことである。筆者自身も、自分の手元の端末では「デジタルコレクション」中のこの 3 冊にはアクセスすることができず、勤務校の大学の附属図書館にわざわざ出向き、そこのカウンター上の端末でやっと読むことができた次第である。これは、著作権の処理の遅延に関係しているのだが、今後速やかに処理が進むことが望まれる。¹¹（他で手軽に読めるので、大きな問題ではないが、実は、原民喜の『ガリバー旅行記』自体も簡単には読めない。）

これらに対して、同じ年（昭和 26 年、1951 年）に出た、中野好夫による種々の翻訳は事情が全く異なっている。種々の翻訳というのは、先に言及した岩波少年文庫版の再話も含めた、全訳、童話、教科書と、本当に各種あるからだ。詳細は松菱の目録を参照してもらうこととするが、これらの翻訳は版を改めつ

⁹ <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1632743>>（2021 年 11 月 19 日閲覧）

¹⁰ <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1633468>>（2021 年 11 月 29 日閲覧）

¹¹ 依頼をすれば「遠隔複写」などの手段を取ることはもちろん可能である。

つ存続しており、現在でも何らかの形で手軽に手にとって読むことができるようになっていて、非常に対照的である。具体的に言えば、松菱の目録の番号では、146 から始まって、(146-2)、147、148、(148-2)、149、150、153、(153-2)、(153-3)、156 までが、出版年が昭和 26 年、1951 年のものである。その後も各種の版本が、(156-2) から (156-3)、160、162、167、193、205、222、231、234、237、243、249、(249-2)、272、281、(281-2)、282、(282-3)、283、(283-2)、285、294、313、314、315、316・・・と延々と続く。ここまでで、やっと昭和 III 期であり、このあと昭和 IV 期に入ってもリストは延々と続いていくのだ。¹² ハイフンの後に数字の 2 や 3 が付されているのは、装丁違いや再版であり、実質的には同じ内容であるし、同じ翻訳が出版社を変えながら再三再四印刷されているような例もある。その結果、中野好夫の翻訳が世間に大量に出回ることになったのである。筆者も恩恵を被った読者の一人なのであるが、戦中から戦後のかなり遅い時期にかけて、もしかすると現在に至るまで、わが国で『ガリヴァー旅行記』といえ、中野好夫による翻訳であったことが伺える。¹³ こうして、戦後の同時期にいくつもの翻訳が出たのだが、訳者によって、その後の出版状況が全く異なっているという事象には改めて注目すべきだろう。これはなかなか興味深い現象であるので、いずれ稿を改めて考えてみたい。

III

さて、原民喜の「アンボニア」の出どころとして、我々は、先に高嶺深雪の

¹² 昭和 III 期、IV 期とは、松菱による年代区分で、昭和 III 期は 1956-75、昭和 IV 期は 1976-88 である。その次は、平成期で、平成 22 年、2010 年までである。

¹³ 中野好夫は、「ガリバー」「ガリヴァ」「ガリヴァー」と、表記を使い分けていて、統一はしていない。上記のリストに先立つ中野好夫による翻訳については、83、85 は、先ほど言及した弘文堂書房から昭和 15 年、1940 年に出た『ガリヴァー旅行記』の上下 2 巻本である。102 は、壮文社版の 4 篇全部の翻訳で、昭和 22 年、1947 年のもの。138 は英和对訳本（研究社、昭和 25 年、1950 年）と、中野好夫自身が戦争中から徐々に『ガリヴァー旅行記』に関わりを持ち出してきた経緯についても分かって興味深い。

「アンボニア」と中野好夫の「アンボニア」とを、その候補に挙げたのだが、その上で、未知の出所の存在も否定しなかった。さらに付け加えるなら、原民喜が全く独自に、どの書物からの影響も全く受けずに、自分自身で「アンボニア」という表記を思いついたという可能性もある。この点は高嶺深雪や中野好夫も同様である。「アンボニア」という表記の元がどこであれ、彼がなぜ「アンボイナ」ではなく「アンボニア」という表記を採用したかが本論の次の検討課題である。従って、以下においては、この表記を思いついた人物が実際には誰であれ、その人物を単に〈翻訳者〉と称して論を進めていくことにしたい。

まず、前半の「アンボ」が「アンポ」になっている点については、「アンポンタン」を読者に想起させる仕掛けと見たい。つまりこれは、日本人読者を想定した明らかに意図的な改変であるということである。試みに「アンボニア」と「アンポンタン」をローマ字表記してみれば、両者は以下のようになる。「アンボニア」は「ANPONIA」、「アンポンタン」は「ANPONTAN」だ。カナ表記だけだと「アンボニア」の5文字中、初めの「アンポ」の3文字しか「アンポンタン」と一致しないが、ローマ字表記だと「ANPONIA」の7文字中5文字が「ANPONTAN」と一致する。すなわち、単純計算で一致率が6割が7割に増えたことになる。発音上、「アンボニア」がいかに「アンポンタン」を思わせる語であるかが少しははっきりするであろう。もともと、ガリヴァーが第3篇の「ラピュタ渡航記」で、イギリスに帰国するための便宜としてオランダ船を選び、ナンガサク（Nangasac）から乗船したのが「アンボイナ号」（the *Amboyne*）であった。スウィフトの原作の、直接的な読者である、18世紀当時のイギリスの読者にとっては、この名称は、いわゆる「アンボイナ事件」を如実に想起させる、忌まわしい名称であり、オランダやオランダ人に対する風刺を遂行するためには格好の名称であっただろう。Norton 版の *Gulliver's Travels* (2002) にも下記のような注釈がある。

As many scholars have noted, this might be another swipe at the Dutch, since the name of the ship is very likely meant to recall the torture and murder of several Englishmen by Dutch colonists at

Amboyna, in the East Indies, in 1623. ¹⁴

これに対して、日本の読者を想定した、原民喜をはじめとする様々な訳者による日本語訳ではどうだろうか。おそらく、何らかの解説や注釈がない限り、戦後の日本人読者の大多数は、「アンボイナ」と言われても何のことかピンとこない、何の連想も働かないことが想定されるだろう。¹⁵ それならば、何か別の言葉に作り替えてしまおう、日本人にも分かりやすい連想を呼ぶように、原作の固有名詞を少し変形させてみよう、という考えを〈翻訳者〉は持ったに違いない。「アンボイナ」の濁点のテンテンを半濁点のマルに置き換えるという、ごく僅かな改変で、まずは「アンポ」すなわち「アンポンタン」の語頭が出来上がる。これは、ガリヴァーの行った先も、帰っていく先も、著者も読者も〈翻訳者〉も、皆「アンポンタン」だと言わんばかりの改変なのである。

問題は語尾の方だ。結果として「アンポ」に「ニア」が付け加わって「アンポニア」となっているのであるが、これは原文の「アンボイナ」の「イナ」を生かして「アンボイナ」とする手もあっただろう。あえてそうせず、「アンポニア」としたのは、地名を表す多くの固有名詞の語尾が、ユーラシア、イースタシア、オセアニアなどに見られるように、「〜ア」で終わっていることと関係があるだろう。この語尾のお陰で「アンポニア」は、いかにもどこかにありそうな固有名詞になるのだ。こうした理由から、「アンポニア」に関しては、これを単なる誤記や誤植と見るのではなく、意図的に〈翻訳者〉が元の「アンボイナ」から「アンポニア」に改変したのではないかと考えられるのである。

とはいえ、この改変は、どうしても必要に迫られてなされた改変であるという程のものではないかも知れない。ここまでとは逆の考え方なのだが、「アンボイナ」のままでも良かったとも思えなくもない。ただし、人によっては「アンボイナ」は日本語の形容動詞の「○○な」に見えるから、不必要に奇妙な感

¹⁴ Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, ed. Albert J. Rivero (New York: W. W. Norton, 2002) 184.

¹⁵ 戦争中の日本の蘭印進出に関係してこの地名がどのように当時の日本で人口に膾炙していたかは未確認である。本論の想定はあくまでも現在の状況に立脚した判断に基づいている。

じが出てしまうというマイナス面はある。「アンポニア」と「アンボイナ」とを並べて見てみれば、「アンポニア」の方がいろいろな面で勝っているのではないだろうか。

原民喜が自分でこの表記を思いついたかどうか、あるいは何かで見て影響されたのかどうかは別として、彼自身が「アンポニア」という呼称を使用しているのは事実である。この語の出どころがどこであれ、原民喜は、作品全体に込められた作者スウィフトの元の風刺の意図を独自に汲み取り、愚かしさを表す一般的な侮蔑の言葉である「アンポンタン」に近い語を使用するという手段によって、スウィフトの風刺の意図である、オランダ（人）に対する風刺を、より広く人類一般にその対象を拡大した風刺へと作り変えていると考えられるのである。たった1語の工夫ではあるけれど、この「アンポニア」という語の使用を通じて、原民喜は自らの『ガリバー旅行記』の再話に、独自の思いを込め得たのではないだろうか。それはすなわち、人は皆いかに愚かであるか、という思いに他ならない。

IV

では、次に、より問題の大きい「ヤーフ」を取り上げたい。先ほど見た「アンボイナ」か「アンポニア」かの件は、たかだか一つの船の名前であるに過ぎなかったのに対し、こちらは第4篇「フウイヌム国渡航記」*Voyage to the Land of Houyhnhnms* の意味、ひいては *Gulliver's Travels* という作品全体の意味に大きく関わる重要な呼称である点が全く異なる。スウィフトの原文では言うまでもなく“Yahoo”であり、日本語への翻訳では、普通は「ヤフー」と表記されるものである。原民喜はなぜこれを「ヤーフ」と表記したのだろうか。以下においてはこのことについて考えて行きたい。

原民喜の再話で第4篇に相当するのは「第四、馬の国（フウイヌム）」であり、この部分は講談社文芸文庫版では177頁からである。数ページを読み進むと早くも183頁で「ヤーフ」という語に出会う。厳密には、ガリヴァーが出会った馬の言葉の中にこの語が聞かれる。

私は馬の声を注意して聞いていましたが、何度も「ヤーフ」という語が聞こえるのです。二匹ともその「ヤーフ」という言葉を仕切りに繰り返していますが、私には何の意味なのか、さっぱりわかりません。けれども、彼らの話が終わると、私は大声で、はっきり、

「ヤーフ」

と言ってやりました。

すると彼らは大へん驚いたようです。それから青毛が近寄って来ると、
「ヤーフ ヤーフ」

と教えるように二度繰り返しました。（183-84 頁）

スウィフトの原作で、この箇所に対応する部分を参考のため記す。原文だとなり長々としているのを、再話では巧妙にまとめてあることが分かるだろう。

I could frequently distinguish the Word *Yahoo*, which was repeated by each of them several times; and although it were impossible for me to conjecture what it meant, yet while the two Horses were busy in Conversation, I endeavoured to practice this Word upon my Tongue; and as soon as they were silent, I boldly pronounced *Yahoo* in a loud Voice, imitating, at the same time, as near as I could, the Neighing of a Horse; at which they were both visibly surprised, and the Grey repeated the same Word twice, as if he meant to teach me the right Accent . . . (338)

以上のように原作では「ヤーフ」は “Yahoo” と表記されているが、その発音は、通例、[ja:hú:] ということになっている。これをカナ表記すれば「ヤーフー」である。しかしながら、従来の多くの日本語訳では「ヤフー」と表記されることが通例である。“Yahoo” は、日本人の英語学習者であれば、はじめの “Ya-” の部分では「ヤー」という長音は使わず、短く「ヤ」とし、あとの “-hoo” を「フー」と伸ばし、結果として「ヤフー」とするのが自然のように思われる。少なくとも筆者自身「ヤフー」以外の表記は（原民喜の「ヤーフ」を除き）見た記

憶がない。もっとも、アクセントの位置は変化があって、第1音節を強く、[jáhu:] とする場合もある。これだとカナ表記は「ヤーフー」よりは「ヤフー」になりやすい。アクセントの位置がどうであれ、「ヤーフー」も「ヤフー」も、ともに末尾は長音で「フー」になるはずだ。¹⁶ これに対して、原民喜はあえて意図的に「ヤーフ」と表記していると考ええるものである。『ガリバー旅行記』だけでなく、他の作品でも原民喜は「ヤーフ」という表記で通していることにも触れておこう。「ガリヴァ旅行記——K・Cに——」では、「ヤーフそっくりの五六匹の生物」や「ヤーフが光る石（黄金）を熱狂的に好む」などの表現で物語の解釈を語っている。（222、223 頁）また、原爆の惨禍を強烈に定着させた詩「ガリヴァの歌」でも「ヤーフどもの咲笑と脅迫の爪」という表現が「馬のいななきとなりて悶絶す」と対置されている。（226 頁）

では、彼が「ヤーフ」という表記にこれほど拘っている理由は一体何なのだろうか。そう考えて各種の先行研究を見てみたのだが、この点を考究したものはないようである。例えば、内田勝の広範な論考「見下ろすことと見上げること：原民喜『ガリバー旅行記』について」（Looking Down and Looking Up: Shifting Viewpoints in Hara Tamiki's *Gulliver's Travels*）でも、この件には特に言及はなく、論の中では一貫して、「ヤーフ」を用いている。¹⁷ 逆に、一般的な「ヤフー」という表記は全く用いられていない。これは、不統一からくる無用な混乱を避けるための配慮であろう。いずれにせよ、筆者を含めて、これまでは誰もが、原民喜が「ヤフー」でなく「ヤーフ」を使っていることを認識はしていても、それ以上の論はなかったということであろう。そこで筆者はあえて、管見を提示してみることにする次第である。

では、まず初めに、このカナ表記がいかに珍しいものであるかを確認しておこう。今日の版本ではどのような表記がされているだろうか。筆者の手元にある近年の版本のうち4つの篇全部をきちんと翻訳してある全訳版では、いずれ

¹⁶ OED では“Yahoo”は(yahū・)となっている。また、朱牟田夏雄編注『Gulliver in the Country of Houyhnhnms』（金星堂、昭和32年、1957年）の注釈（111頁）では、“Yahoos”は、[jəhuːz]となっている。

¹⁷ 岐阜大学地域科学部『岐阜大学地域科学部研究報告』22-23号（2008年）
<<http://hdl.handle.net/20.500.12099/22099>>（2021年11月21日閲覧）

も、ことごとく「ヤフー」という表記になっている。近年の版本とは、具体的には、順不同に、山田蘭、柴田元幸、平井正徳、中野好夫、高山宏、富山太佳夫、坂井晴彦、梅田昌志郎、江上照彦らによる翻訳のことである。¹⁸ いずれも「ヤフー」としてあるが、このことは、まずは想定の範囲内であった。

このように、現在ではごく一般的である「ヤフー」に対し、「ヤーフ」がいかに特殊かということが分かる事例を2つ挙げよう。この論文の草稿の執筆中に、筆者はワープロソフトで頻繁に「ヤーフ」と打ったのであるが、打った途端に勝手に「ヤフー」となってしまう、素直に「ヤーフ」とはならなかった。また「ヤーふ」と、末尾に平仮名の「ふ」が混じってしまうことも多々あった。このことから、「ヤーフ」という表記がかなり特殊なものであるということが分かる。あるいは、インターネットの検索で「ヤーフ」と入力してみると、「ヤーフ」の結果ではなく、「ヤフー」と入力した時と同じ結果が列挙されてしまうという現象が起こる。入力の間違いだと AI が勝手に判断するのであろう。筆者が調べてみたいと思って入力した「ヤーフ」という語での検索はできない、という事態が生じてしまうのである。このことも、「ヤフー」が通常の言葉であるのに対して、「ヤーフ」という語は全く一般的な語ではないことの証左になるだろう。

先の「アンボニア」の項で、原民喜は自分の再話を書く際に、先行する訳書を参考のため見たかどうかを少し問題にしたが、ここで改めて過去に何十種類も出版された *Gulliver's Travels* の日本語への翻訳の中で、原民喜以前に「ヤーフ」という語を使用している版がないかどうか確認してみたい。そのためには「デジタルコレクション」が、やはりとても便利だ。過去に出た *Gulliver's Travels* の翻訳は多数存在するが、古いものから順に閲覧して行ってみると、僅かに1件だけ問題の「ヤーフ」に近い表記をしているものに出会うことができた。スウキフト著、佐久間信恭訳『新譯 ガリヴァー旅行記』（尚栄堂、明治44年、1911年）である。これは松菱の目録の19番である。その目次を見ると、第4篇「怪馬国旅行記」の第7章は「ヤーフーの事情○ホウインハムの徳行○

¹⁸ これらはいずれも全訳だが、最後の江上照彦訳編『ガリバー旅行記』（社会思想社、昭和45年、1970年）だけは全訳ではない。

其少年の教育○会議」となっている。原民喜の「ヤーフ」とは微妙に異なっているものの、非常によく似た形の「ヤーフー」となっている。次に本文を見てみると、元の古い書籍が傷んでいるせいだろうか、あるいは、古いマイクロフィルムを撮影してデジタル化した為であろうか、文字がかなり判読しづらいのであるが、第4篇の冒頭から、「ヤーフー」という表記が非常に多く目につく。本文中にこの語が初めて出る 261 頁から引用する。その際、縦書きを横書きに、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めて記す。ルビは省略する。

彼等は屢々ヤーフー (Yahoo) という語を反復する。ヤーフーの意味はなんであるか分からぬが、余は二匹の馬が互いに談話をしている際に独でこのヤーフーという語を練習して見たのである。二匹の談話が終わったから余は出来るだけ甘く嘶く声に似せてヤーフーと声高らかにやって見たところが、彼等は大変驚いたような様子をして居った。それから栗毛の方が自分で二度ばかりヤーフーと発音して余の発音の正しくないことを矯正してやるというような風であったから、余も度々ヤーフーヤーフーと発音したところが、発音する毎に甘くなった (後略) ¹⁹

文中の「甘く」には「うまく」とルビが振ってある。「甘い」ものは「美味しい」のであるが、ここでは「上手い」ということになる。他にも「余は」や「出来るだけ」など、古い日本語に特有の興味深い表記が見られる。それはともかく、ここでの要点は、この翻訳では元の “Yahoo” が、一貫して「ヤーフー」と訳されているということである。先に言及した、[ja:hu:] という発音に依っているわけだ。唯一の例外は以下の部分である。ガリヴァーが馬の自宅に連れてこられた場面である。

主客の間に、種々なる物語があつたが其の物語はみな、世の一身に関するものらしく、時々余の方に眼を配りながら、ヤーフ、ヤーフの声が絶

¹⁹ <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/896774>> (2021 年 11 月 28 日閲覧)

えることはなかったのである。

この翻訳では、終始一貫して「ヤーフー」という表記が用いられているのだが、この箇所だけは「ヤーフ」となっている。統一が取れていない理由は定かではないが、むしろ我々としては、我々が探し求めていた「ヤーフ」という表記を見出せたことを重視したい。この場面での「ヤーフ、ヤーフの声が・・・」という表現からは、それが直接ガリヴァーの眼前で発せられた音声であることが分かる。この翻訳を先に引用したスウィフトの原文と比較してみると、全体がしっかり訳してあることが分かる。その点では、原民喜の再話とは大きく異なっている。

本論の主題である「ヤーフ」から少し離れるが、現在は「フウイヌム」ないし「フイヌム」に定着している感がある “Houyhnhnm” についても、明治時代の佐久間信恭は「ホウインハム」と訳していることにもここで注目しておきたい。現在では一般的には「馬の国」ないしは無難に「フウイヌム国」や「フイヌムの国」などと表記される地名についても興味深い。彼は自分の訳語の「ホウインハム」を流用して「ホウインハム国」などとするかと思いきや、彼はそうはしていない。「怪馬国」と、かなり意気込んだ意識をしてあるのだ。確かに “Houyhnhnm” は「怪馬」ではあるが、これは勇み足が過ぎたようだ。この、明治時代の古い翻訳を読むにつけ、様々な点で、令和の時代の我々にとって非常に新鮮に映る事柄が非常に多いことが分かる。文学作品一般について、その受け取り方がいかに多種多様であり得るかを考える上で、この古い版本は実に示唆に富んでいる。種々の珍しい表記を見られることは、古い文献を読む際の醍醐味の一つであると言っても良いだろう。

元来、“Houyhnhnm” は、馬の嘶きを、無理を承知で英字に置き換えたものだが、その発音は通常、[hui(h)nm]、[hwinim] などと解されるものだ。²⁰ 英字で書いてあっても発音がよく分からない言葉を、さらに日本語のカナ表記に置き換えようとするれば、更なる無理が生じるのは当然のことである。従って、

²⁰ *OED* の “Houyhnhnm” は (hwi·hn'm, hwi·n'm) となっている。また、朱牟田夏雄の注釈では、“Houyhnhnms” は、[hui(h)nəmz, hwinimz] となっている (111 頁)。

どんな日本語訳にも一長一短があると考えねばならない。完全な表記はそもそもあり得ないからだ。筆者も常々「フウイヌム」と記しているのだが、「ホウインハム」のような変わった表記を見ると、自らの「慣れ」を強く反省させられる。“Houyhnhnm”のありうべき発音の多様性と、これまでの多くの日本語訳における様々な表記の多様性とは、“Yahoo”の比ではないので、今はこまめでとし、いずれ稿を改めて詳しく論じたい。

さて、佐久間信恭による翻訳は、*Gulliver's Travels* の翻訳史上、最初期に4つの篇全てが日本語に訳された、記念すべき版の一つである。²¹ 彼が、多くの英語教育関係の著作を残していることも分かった。上記の引用箇所に見られるように、カッコ書きで (Yahoo) と挿入し、元の綴りを読者に紹介している点にも、彼の英語教育関係者としての真摯な態度が良く表されているようだ。しかしながら、それ以上の細かい情報が不足しているため、彼の英語力自体や、文学作品の翻訳の方針もよく分からない。この人物について考えることは今後の課題とし、今は「ヤーフー」（一部「ヤーフ」）の出どころ（の一つ）として記録しておくに留めたい。この人物に限らず *Gulliver's Travels* の翻訳に携わった多くの人々についても同じことであるのだが、我々は、いかに作家自身のことは多くを知り得ても、翻訳に携わった人物となると、途端に情報が限られてくることに気付かされるということも、ここに記しておく。

さて、本論の当面の問題は、原民喜自身がこの明治時代の翻訳を知っていたか否かであるが、残念ながらそれはもっと分からない点である。この佐久間信恭による翻訳が世に出たのは、明治44年、1911年のことである。一方、原民喜の生年は、明治38年、1905年であるから、彼はすでに幼少期を迎えている。原民喜の広島の家は裕福であったので、この書物も彼の実家にあったかも知れない。原民喜は、大正13年、1924年に慶應義塾の文学部予科に入学する。予科の3年からのクラス担任は西脇順三郎であった。昭和4年、1929年には文学部英吉利文学科に進むが、大学生として東京で生活している時に、学内外

²¹ 松菱の目録では、4つの篇の全てが初めて収録された版は、佐久間信恭による翻訳であるかのように記されている (viii)。だが、実際は、それより2年前の、松原至文／小林梧桐訳のスウキフト『ガリヴァー旅行記』（昭倫社、明治42年、1909年）であると思われる。

のどこかで佐久間信恭による翻訳に触れる機会があったかも知れない。このうち彼は、戦争中の昭和 17 年、1942 年から、船橋市立船橋中学校の嘱託講師として英語を教え始めるが、この時期にこの本に接する機会があった可能性もある。嘱託講師は、昭和 19 年、1944 年まで勤めている。

仮に、原民喜がこれをどこかで読んでいたとすれば、その影響があったとも言えるし、仮に全く読んでいなかったとすれば、原民喜の「ヤーフ」の独自性、独創性がより際立つということになるであろう。いずれにせよ、「ヤーフ」という表記が非常に珍しい独自のものである点は変わらない。ちょうど、前述の「アンボニア」と同じことである。「ヤーフ」という表記を原民喜が採用していることに何らかの書物の表記が影響しているか否か、という問題に関して言えば、佐久間信恭の『新譯 ガリヴァー旅行記』における「ヤーフー」（一部「ヤーフ」）が影響を与えた可能性があるという点であると推測されるということである。ただし、原民喜の文体や原作からの省略の仕方に関して考えてみた時、両者の翻訳を比べてみる限りにおいて、原民喜がこの本を座右において参考にしたというような直接の影響関係はなさそうに見える。両者の文体は全く異なっており、一方は全訳、他方は再話と、全く相反する特徴を備えているからである。仮に影響があったとしても、それはもっぱら「ヤーフ」という表記に関するものであるという点には留意すべきであろう。

ところで、今我々が「ヤーフー」や「ヤーフ」で問題にしている 2 つの翻訳については、佐久間信恭訳は、松菱の目録の 19 番、原民喜の再話は 151 番である。この両者の影響関係を云々するだけでなく、両者の間に横たわる 131 種類の作品にも目を通すべきであろう。もっとも、それらの多くは第 1 篇や第 2 篇の訳であり、最後の第 4 篇が訳されているものはさほど多くない。そこで、主な翻訳を年代順に検討してみよう。今後の研究の参考とするため、ついでに“Houyhnhnm”がどう表記されているかも付記しておく。読みやすさのために、ここからの表記は、しばらくの間、通常の段落は設けず、その代わりに行間を適宜空けることにする。関連の URL は本文中に記す。

まず、14 番、松原至文／小林梧桐訳のスウキフト『ガリヴァー旅行記』（昭倫

社、明治 42 年、1909 年）を見てみると「ヤフー／フイーンム」である。²²
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/896775>（2021 年 11 月 28 日閲覧）

次に、22 番、中村詳一の『ガリバア旅行記』（国民書院、大正 8 年、1919 年）の「ホインフム國」を見てみると「ヤフー／ホインフム」である。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/959531>（2021 年 11 月 28 日閲覧）

さらに、26 番、平田禿木による翻訳、ジョナサン・スキフト『ガリバア旅行記』（富山房、大正 10 年、1921 年）の「馬之國旅行記」では「ヤフウ／フウインム」である。この版は、『図説 児童文学翻訳大辞典』でも、表紙のカラー写真入りで「少年少女が身近に置いて永く愛読するのに相応しい翻訳」として紹介されている。²³

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/945582>（2021 年 11 月 28 日閲覧）

また、46 番、日本童話研究会『ロビンソン物語：外 2 編』（九段書房、昭和 2 年、1927 年）には『ガリバー旅行記』も収められている。これは学校家庭文庫 4 である。²⁴ この中の「馬の國旅行記」では、「ヤフウ／（馬）」である。かなりの縮約版であるため「フウイヌム」に相当する訳語はなく、単に「馬」と表記されている。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168670>（2021 年 11 月 28 日閲覧）

次は少し年代が下り、戦後の版となるが、110 番、野上豊一郎著『ガリヴァの旅』（小山書店、昭和 23 年、1948 年）の「フウインム（うま人）の國」では「ヤフウ／フウインム」となっている。この再話は、梶文庫（ふくろぶんこ）の第 3 巻である。スウィフト著ではなく、野上豊一郎著となっていることに注

²² 松菱の目録では『ガリヴァ物語』（再話）となっているが、正しくは『ガリヴァー旅行記』（全訳）である。

²³ 『図説 児童文学翻訳大辞典』第 1 巻【図説 日本の外国児童文学】（大空社、平成 19 年、2007 年）252 頁。

²⁴ 「デジタルコレクション」の表記は「学級家庭文庫」だが、正しくは「学校家庭文庫」である。実際の訳者が誰であるかは未詳。

意。再話の場合はこのように訳者ではなく著者と名乗るのが通例のようだ。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168076>> (2021 年 11 月 28 日閲覧) ²⁵

同じ年に出た、122 番、筒井敬介著『ガリバー十六年七か月の旅』（大雅堂、昭和 23 年、1948 年）は、世界少年文学選集の 1 冊。ここでも「ヤフー／（馬）」である。「フウイヌム」に相当する訳語はなく、単に「馬」と表記されている。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168863>> (2021 年 11 月 28 日閲覧) ²⁶

終戦直後のこの頃になると、それまでは「ヤフー」と「ヤフウ」の 2 通りの表記があったが、「ヤフウ」は消え去り「ヤフー」が定着したようである。いずれにしても、この両者以外のものはないようである。「デジタルコレクション」に入っているものの、現在のところ一般のパソコンでは見られず、契約を交わしている図書館の端末を使わねば見られないものに以下のものがある。これらすべてに目を通せたわけではないので、現時点までに分かった限りの情報を以下に記す。年代は再び大正期に遡る。

25 番、野上豊一郎『馬の國』（赤い鳥社、大正 9 年、1920 年）は、鈴木三重吉の『赤い鳥』の 5 月号、6 月号、8 月号に分載された童話である。5 月号に 6 頁、6 月号に 4 頁、8 月号には 6 頁と、かなり短かく再構成されてしまっている。ここでは「ヤフウ／フウインヌム」となっていて「ン」を 2 回繰り返している点が特徴的だ。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168863>> (2021 年 11 月 19 日閲覧)

35 番、濱野重郎著『ガリバー旅行記』（イデア書院、大正 14 年、1925 年）では「ヤフウ／（馬）」である。児童図書館叢書の 1 冊。フウイヌムが単に「馬」

²⁵ 「デジタルコレクション」の表記は『ガリヴァの旅』となっているが、正しくは『ガリヴァの旅』である。また、日付が同じであることから、これと同じ版であると思われる <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8347395>> は未見。

²⁶ 同じ版であると思われる <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8346256>> は未見。

となっているのは再話にはよく見られることである。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1717561>> (2021 年 11 月 5 日閲覧)

42 番、奥野庄太郎著『ガリバー旅行記』（中文館書店、昭和 2 年、1927 年）は未見である。おそらく「ヤフウ／（馬）」で間違いないであろう。²⁷

45 番、野上豊一郎『ガリヴァの旅』（国民文庫刊行会、昭和 2 年、1927 年）は、平田禿木訳のラム『沙翁物語』と合本で非売品であるが、立派な造本である。挿絵も素晴らしい。ここでは「ヤフウ／フウインム」であるが、一部〔馬人〕という表記も見られる。例えば、第 4 篇の表題は「フウインム〔馬人〕の國への航海」である。

57 番、鈴木彦次郎訳『ガリバアの旅 他一篇』（改造社、昭和 5 年、1930 年）では「ヤフウ／フーインム（一部フウィナム）」である。世界大衆文学全集の 50 で、訳者の肖像写真入りである。その写真の中にスウィフトの肖像画が小さく嵌め込まれていて、訳者が作者より優位になっている趣きである。さらに、珍しい、ヴァレンチン・ウキリアムス『海老足男の復活』も含んでいる。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1181538>> (2021 年 11 月 5 日閲覧)

65 番、平田禿木『ガリバア旅行記 後編』（春陽堂、昭和 7 年、1932 年）（少年文庫 61）は未見。国立国会図書館にも一般の大学図書館にも所蔵がない模様であるが詳細は不明。

²⁷ 松菱の目録では、奥野庄太郎の『ガリバー旅行記』は「学習室文庫」の一冊であるが、「デジタルコレクション」では、奥野の「ガリバー旅行記」は、東西童話新選、地の巻（昭和 3 年、1928 年）に収録されたものが読める。4 連作の短編の趣きである。ここで見られる表記は「ヤフウ／（馬）」である。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1718031>> (2021 年 11 月 29 日閲覧)

奥野庄太郎は、天の巻、人の巻、文の巻も出していて、いずれの巻にも多くの童話が掲載されている。筆者の見どころ、文体も良く、装丁や挿画も美麗である。なお、各巻に付された同一内容の「はしがき」によれば、「学習室文庫」は「一萬部を賣り盡し」たとのことである。

82 番、平田禿木『ガリヴァ旅行物語』（富山房、昭和 13 年、1938 年）では「ヤフウ／フウインム」である。（おそらく、上の 65 番も、これと同じ表記「ヤフウ／フウインム」か、あるいは、同じ訳者（平田禿木）の 26 番のように「ヤフウ／フウィナム」ではないかと推測される。）

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1265042>>（2021 年 11 月 19 日閲覧）²⁸

88 番、野上豊一郎譯『ガリヴァの航海（下）』（岩波書店、昭和 16 年、1941 年）（岩波文庫 2599-2600）は「ヤフウ／フウインム」。上記、45 番、同じ訳者の『ガリヴァの旅』（国民文庫刊行会、昭和 2 年、1927 年）とほぼ同一内容の改訳版である。一部漢字をカナ表記に改めるなど多少読み易くしてある。²⁹

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1689641>>（2021 年 11 月 5 日閲覧）

91 番、町野静雄譯『ガリヴァー旅行記（下）』（改造社、昭和 16 年、1941 年）では「ヤフー／ハウインム」で、「ン」を 2 回言っている。「ハウ」も珍しい。今はない改造文庫の 1 冊、第 2 部第 495 篇である。特筆すべき点として、第 3 篇の「リンダリノ」のくだりを補遺として訳出、紹介してある。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1689657>>（2021 年 11 月 5 日閲覧）

続いて、以下は先に「アンボニア」の問題で参照した書目であり、いずれも戦後間もない頃の訳である。つまり、我々はやっと原民喜と同時代に差し掛かったということである。ここまでの寸評では、つい「フウイヌム」の方ばかりに注目してきてしまったが、「ヤフー」について改めて見直してみると、この時期になると、「ヤフウ」の表記はなくなり、「ヤフー」に統一された感がある。一方、「フウイヌム」は「フウインム」もあり、統一されるに至っていない。

²⁸ この URL で見られる版は『ロビンソン漂流記・ガリバア旅行記』（富山房、昭和 13 年、1938 年）であり、松菱の目録とは書名が異なっている。かつて別々に売られていた 2 冊が合本になったものであると思われる。

²⁹ 現行の岩波文庫は平井正徳訳『ガリヴァー旅行記』（昭和 55 年、1980 年）だが、これはその前の版。

141 番、高嶺深雪『ガリバー旅行記』（東光出版社、昭和 26 年、1951 年）は、「ヤフー／フウイヌム」である。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1633636>>（2021 年 11 月 22 日閲覧）

143 番、那須辰造『ガリバー旅行記』（講談社、昭和 26 年、1951 年）では、「ヤフー／フウイヌム」。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1632743>>（2021 年 11 月 22 日閲覧）

144 番、小沼丹『ガリヴァ旅行記』（小峰書店、昭和 26 年、1951 年）は、「ヤフー／フウインム」となっている。

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1633468>>（2021 年 11 月 22 日閲覧）

なお、ここではいちいち挙げなかったが、中野好夫によるいくつかの種類の翻訳があるのは先に見た通りである。それらは概ね「ヤフー／フウイヌム」となっている点を付記しておきたい。ここまでは松菱の目録に即し、「デジタルコレクション」に頼りながら翻訳を中心に見てきた。前半は居ながらにして見られるものを、後半は契約のある図書館でしか見られないものを列挙した。それぞれに寸評を付けたが、これは余計なことだったか。ともかくその結果は、原民喜の「ヤーフ」は全くなく、「ヤフー」もしくは「ヤフウ」であったことをここで確認しておきたい。

しかしながら、我々がこのことをより突き詰めて調べようとすれば、翻訳に当たるだけでなく、各種の評論の類にも目を通すべきであるだろう。すぐに念頭に浮かぶのは、やはり夏目漱石の『文学評論』（春陽堂、明治 42 年、1909 年）であるのだが、それも「ヤフー／フーインムス」という表記で一貫している。いくつかの翻訳を出している平田喜一（禿木）についてはどうか。彼が執筆を担当している研究社の英米文学評伝叢書（17）『スキフト』（研究社、昭和 12 年、1937 年）でも「ヤフー／フウインム」となっている。現在のところこの 2 書に関しては「ヤフー」なのだが、他の書籍ではどうか問題としては残る。

さらには、英語の教科書用に使用された版本はどうであろうか。それらは、英文に添えて注釈が添えられていたり、日本語の翻訳が添えられていたりするものである。日本語の部分で「ヤーフ」と表記してあるものがないとはい切れない。しかしながら、こうした教科書の類の多くは、第1篇や第2篇だけを掲載したものばかりで、我々が問題にしている第4篇までを含むものはあまりないようである。ただし、第1篇や第2篇だけの英文を使用してあるものであっても、編集者や注釈者などの「はしがき」のような位置付けで書かれた解説の部分の中には、作品全体についての説明が書かれている場合もあり得る。その中には“Yahoo”や“Houyhnhnm”も紹介されていて当然であろう。そうした教科書の一つが以下に挙げるものだ。これは一応和書であるから、表題もそれらしく記せば『*Gulliver's Travels* (ガリヴァー旅行記)』となろう。この教科書版については松菱の目録に記載はない。筆者がたまたま「デジタルコレクション」で見つけたものである。興味深いことに「ヤーフー」という表記が見られる。この教科書は英学生新聞社から、昭和23年、1948年に出たものである。解説の文から引用する。

すなわちこの國を主宰するものは馬(フーイヌム)であり、人間は Yahoo (ヤーフー) という醜惡な動物に過ぎない。ガリヴァーがこの國に上陸したときにぞつと身慄いするほどの嫌惡感を感じたというあの半人半獸の動物がすなわちヤーフーなのである。(viii)

我々が探している「ヤーフ」ではないものの、これに近い「ヤーフー」という表記が確かに見られるのである。先に述べたように、原民喜は中学の嘱託講師を2年ほど務めていたが、この教科書の出版がもう少し早ければ、この版を手にしていただろう可能性もあるのだが。むしろ、これの監修者の一人に慶應大学の元教授、堀英四郎という人物が名を連ねていることの方が、原民喜との関わりを考える上で気にかかる点だ。この人物との何らかの関わりを通じて、「ヤーフ」という表記ができたという可能性もあるのではないだろうか。

結局のところ、原民喜の「ヤーフ」に最も近いものは、ここで始めに取り上げた佐久間信恭訳の「ヤーフー」と「ヤーフ」、さらには、英語の教科書とし

て使用された英學生新聞社の『Gulliver's Travels（ガリヴァー旅行記）』の解説に見出された「ヤーフ」の2件だけであったということに、現状ではなる。これはやはり少ないと言わざるを得ない。また、今後同様の手間を更にかけて、他の版本を調べてみても、「ヤーフ」が我々の前に姿を表す可能性は極めて低いだろう。

V

以上見てきたように、当時すでに「ヤーフ」や「ヤフウ」が定着している中で、原民喜は、あえて一般的な「ヤーフ」や「ヤフウ」を避け、非常に珍しい「ヤーフ」という表記を選び取ったという見方ができるということに異論の余地はないであろう。出どころは結局は不明なのであるが、自らの再話に「ヤーフ」と記していることは事実である。これは、「アンボニア」と同じ事情である。では、なぜ原民喜は、一般的な「ヤーフ」や「ヤフウ」ではなく、「ヤーフ」としたのであるか。この点をさらに深く考えてみたい。結論から言えば、可能性として考えられるのは、「農夫」や「坑夫」で代表される「○夫」を表したかったのではないかというのが筆者の考えである。「○夫」という表記は、近年はあまり流行らない。それは、おそらく多くの人が「○夫」という表記に差別的な感じを持つからであろう。しかしながら、戦前から戦中戦後を通じての昭和期において、あるいはもっと古く、明治大正期においてもおそらく、「○夫」という表現は男性の一般的な労働者階級を、特に差別意識もなく表現した語であるはずだ。むしろ、「ヤーフ」と表記することで、“Yahoo”を動物ではなくヒトに近づける効果を原民喜は見込んだのではないだろうか。もちろん、“Yahoo”という生物自体をどういう位置に置くかは大きな問題である。ヒトでないことは確かだが動物でもない。ちょうどヒトと動物の中間にいる存在であると考えることが相当であろう。すると、問題は、“Yahoo”の位置をヒトに近づけて考えるか、動物に近づけて考えるか、ということになる。そしてこの判断は、読者に投げかけられているはずだ。読者の自由に委ねられている、と言っても良い。原民喜はその自由を行使し、“Yahoo”を「ヤーフ」と表現したと考えたい。訳語を当てる際に、ヒト、それも男性に近い存在として読者に

“Yahoo”を把握して欲しかったのではないだろうかということである。“Yahoo”をヒトとして見る。そのことを通じて、“Yahoo”の抱える様々な問題を、我々人間と共有させる。“Yahoo”の持つ忌まわしさをヒトは皆それぞれに抱えているものなのだ、ということを強調する立場だったと言ってもいい。“Yahoo”の悪徳は、ヒトの悪徳ということである。

先ほど、「○夫」の例として「農夫」や「坑夫」を挙げたが、「ヤーフ」と韻が揃ったものは意外と少ない。他に「工夫」「鋳夫」くらいしかない。「車夫」となると、語感が少し遠のいてしまう。一方、女性を表す「婦」を使った言葉は興味深いことに意外と多い。「娼婦」「情婦」「毒婦」などがすぐに思いつくであろう。これらいずれも悪い意味で用いられる言葉である。男性中心の家父長制社会での性差別的な言語だ。それはともかく、こうしてみると、結果的に原民喜の意図がどうであったかは関係なく、「○夫」とともに「○婦」も、ヒトを表す言い方に含めて良いことになりはしないだろうか。結局のところ、「ヤーフ」という言葉は、女性も男性も関係なく人間一般に結びつきやすい言葉であるということになる。すなわち、「パット剥ギトッテシマッタ」世界を現出させたのはヒト、原爆を投下したのもヒト、戦争を起こしたのもヒト、ということになる。

では、男女双方を含み、「ヤーフ」と音の近い「夫婦」はどう考えたら良いであろうか。「ヤーフ」と、「フウフ／フーフ」とは、確かに音は近いのであるが、これは何とも判断がつかない。原民喜といえば、妻との関係が非常に親密であったことが知られているが、そうした個人的な人生の経験がどれくらい作品の一部を構成するだけであるに過ぎない単なる固有名詞に投影されているかどうかを判断しようとする自体に、問題が孕まれているからだ。「夫婦」は、今は一旦保留にしておくしかないだろう。

「夫婦」はどうかを少し考えたついでに、男女の問題に戻ろう。先ほど、「○夫」は男性、「○婦」は女性、「夫婦」は男女双方、と短絡的に述べたが、考え直してみれば、こうした単純な考え方自体、旧来の考え方の一つとして問題になるであろう。なぜなら、令和の現代では、男性、女性という区分があまり意味を持たなくなってきたからだ。男性も女性も、それ以外の微妙な性別の存在も含めて、全てヒトであると捉えるべきであった。「○夫」や「○婦」

という語からの連想で読者が広い意味のヒトを漠然と思えばそれで十分なのではないだろうか。ただしこれは、令和の現代の感覚であって、原民喜の時代、戦後間もなくの、いまだに旧弊が墨守されたままの昭和の世情には当てはまりにくい事柄であることにも注意しておくべきである。

では、さらに深く「ヤーフ」という語の持つ特徴を考えてみよう。まず、「ヤーフ」の語頭の「ヤ」からの連想として「野」という文字が思い浮かぶであろう。してみると、「ヤーフ」は「野夫」であるということになる。³⁰ 長音の「ー」は失われてしまうのであるが、この「野夫」こそ、「ヤーフ」という特殊な表記に込められた原民喜の意図として相応しいのではないだろうか。「野夫」は田舎者という意味であるので、現在の日本語ではほとんど口にされることのない語である。「野夫」よりは「田夫野人」の方がまだしも耳にする機会が多いが、これとてもはや死語ではないかと思われる。従って、現在の感覚で原民喜の再話『ガリバー旅行記』を読み「ヤーフ」という語に出会ったとしても、多くの読者は単に、これは例の「ヤフー」のことだなと感じ、先に挙げたパソコンのように、我々ヒトも勝手に脳内で「ヤフー」に変換して事足りているということになっているに違いない。原民喜が「ヤーフ」という表記に込めた意図が、仮に上記のようなものであったとしたら、残念なことにそれはもはや当初彼が意図した効力を失ってしまったということに他ならない。

普通に行われる「ヤフー」や「ヤフウ」という表記を避け、あえて「ヤーフ」という変則的な表記を採用することを通じて、「○夫」「○婦」という、明らかに人を表す言い方に近づけることで、さらに「野夫」を連想させることで、原民喜は、『ガリバー旅行記』（昭和26年、1951年）という自らの再話を戦後まもなくの時期の日本人の読者に、“Yahoo”をより身近な存在に感じさせたに違いない。従ってこのことは日本語への翻訳の場合にのみ見られる特殊な事情であるということにもなる。

元来、スウィフトが、“Yahoo”という語を創造した理由は、さまざまに推測されている。現時点で筆者が最も納得している説は、嫌悪を表す感嘆詞の“Yah!”と“Ugh!”とを組み合わせで作ったとする、ヘンリー・モーリー(Henry Morley)

³⁰ 「野婦」という語はないようなので、ここは「野夫」のみを挙げる。

らの古い説であるが、これは英語にとどまらず日本語でも「嫌(いや)」の「い」が落ちて「や」となる例からも容易に推測されるように、感覚的にも分かりやすい理由づけではないだろうか。「ヤだ」や「ヤーだ」などは誰しも言ったり聞いたりしたことがあるだろう。

また、これはにわかには賛成しづらい説であるが、ユダヤ人学者がヘブライ語に関連づけて唱えている説もある。リチャード・クライダー(Richard Crider)の“Yahoo (Yahu): Notes on the Name of Swift's Yahoos”である。³¹ この論文では、英語である(と一応考えられる)“Yahoo”の語源をヘブライ語に求めている。この点では、我々が行なっている、英語から日本語への翻訳の問題とは方向性が真逆ではある。しかしながら、英語の“Yahoo”をそこから切り離し、自分の言語に近づけて解釈するという態度は、実は、我々が本論で試みてきたことと同じであるから、その点は評価したい。作品自体から離れてしまうことになりかねないが、外国人の読者がある作品に接する際に、自分たちの言語が何であれ、それに近づけていく自由を尊重すべきである、という考え方に立つての判断である。“Yahoo”にせよ、“Houyhnhnm”にせよ、語源はおそらく一つに限定できないであろうが、このことは筆者も兼ねてより興味がある点であるので、また稿を改めて追求してみたい。もちろん、これら以外のその他の多くの特殊な固有名詞についても同様である。クライダーの説についてさらに言えば、*Gulliver's Travels* のヘブライ語訳で、“Yahoo”や“Houyhnhnm”がどのように訳されているかも興味がある。

結び

本論では、原民喜の翻訳した『ガリバー旅行記』という再話を取り上げ、その中で特に際立っていた2つの固有名詞である「アンボニア」と「ヤーフ」について考察してみた。「アンボニア」には「アンボンタン」を、「ヤーフ」には「野夫」を、それぞれの理由として提示してみた。いずれも、我々日本人読者にとって馴染みの言葉を連想させるために、あえてこのような改変を原民喜

³¹ <<https://ans-names.pitt.edu/ans/article/view/1351/1350>> (2021年11月30日閲覧)

は行なったのではないか、ということである。原民喜の『ガリバー旅行記』には固有名詞の点でいくつかの疑問点があることは事実である。さらに言えば、それらはスウィフトの原作から離れて、勝手な訳し方をしてしまった瑕疵であると言えるかも知れない。その点を救済し、さらに肯定的な意味づけをしてみようというのが本論の趣旨であった。上手く行ったかどうかは定かではないが、少なくともこれまで論者によってあまり取り上げられなかった点を拾い上げることはできたのではないだろうか。海外の文学作品を自国語に翻訳する際は、いろいろな制約がある。それらを乗り越えるついでに、翻訳者が自分なりの工夫を凝らすことも同時に可能だということも分かった。今後の課題は山積みになってしまっているのだが、逆に言えば、*Gulliver's Travels* という作品にはそれだけ多くの論点を設定することが可能なのである。このことも改めて確認することができたのではないだろうか。

本論では文献に当たる際に、松菱多津男の『邦訳「ガリヴァー旅行記」書誌目録』を座右に置きつつ、「国立国会図書館デジタルコレクション」に多くを依存したが、特に後者については、コロナ禍の中では大変ありがたいことであった。もちろん数々の書籍の実物に全く接さなかったわけではないが、直接本に手を触れずに画像で見られるという点が利点であった。今後のポストコロナの時代を考えた時、文中でも述べたように、より手軽に利用できたり、使い勝手が改善されたりすれば、これまでに見出せなかった多くの事柄に注目することができるようになることが期待されるだろう。

松菱の目録については、これが大変な労作であることは改めて言うまでもない。よくぞこれだけの数を一個人が集められたものである。ただ、惜しむらくは、掲載されている本の情報が「デジタルコレクション」と微妙にずれていたりと、著者名の表記が全くされていなかったりする。訳者によって、また版によっても、スイフト、スウィフト、スキフト、スウキフト、など、本当に様々なのであるが、著者名の表示を一切欠いているのだ。もし再版の機会があれば是非この点も改善して欲しいものである。細かい情報の誤りや、いまだに情報が得られていない箇所の加筆修正も含め、平成 23 年、2011 年以降のバージョンの増補がなされることも期待されることである。

本論は、原民喜の『ガリバー旅行記』が大人向けか子供向けかということด้วย

論じ始めたのであるが、これも実際は単純に2つに分けられるものでもない。それはちょうど、ヒトが男性と女性の2つに分けられないようなものだ。大人並みに賢い子供もいれば、子供並みに愚かな大人もいるのは言うまでもない。もっとも、大人は賢く、子供は愚かであるという考え方自体に問題がないわけではないけれども。令和の現在は、いろいろな障害を考える際に「スペクトラム」という考え方をすることが一般化してきているが、これは、いろいろな差異を考える際に適当な考え方であるに違いない。同一性と差異、差別と偏見、寛容と不寛容などの問題を考えていくことは、今後ますます必要になってくるであろうからだ。だが、先の見えない混沌とした世界に今の我々はいることに変わりはない。その中で、スウィフトの *Gulliver's Travels* は、あるいは、原民喜の『ガリバー旅行記』は、依然として我々に問題を投げかけている。

参考文献

- 原民喜『ガリバー旅行記』東京：主婦の友社、昭和26年、1951年。
——『原民喜のガリバー旅行記』東京：晶文社、昭和52年、1977年。
——『ガリバー旅行記』東京：講談社、講談社文芸文庫、平成7年、1995年。
朱牟田夏雄 編注『Gulliver in the Country of Houyhnhnms』東京：金星堂、昭和32年、1957年。
原田範行、服部典之、武田正明『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈〔注釈篇〕』東京：岩波書店、2013年。
松菱多津男『邦訳「ガリヴァー旅行記」書誌目録』横浜：春風社、平成23年、2011年。
Jonathan Swift. *Gulliver's Travels*. Ed. Albert J. Rivero. New York: W. W. Norton, 2002.
——. *Gulliver's Travels*. Ed. David Womersley. The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, Vol. 16. New York: Cambridge UP, 2012.

参考資料

ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) 原民喜訳『ガリバー旅行記』(*Gulliver's*

Travels) 青空文庫。

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000912/files/4673_9768.html> (2021 年 11 月 30 日閲覧)

国立国会図書館デジタルコレクション。<<https://dl.ndl.go.jp>> (2021 年 11 月 30 日閲覧)

内田勝「見下ろすことと見上げること：原民喜『ガリバー旅行記』について」

(Looking Down and Looking Up: Shifting Viewpoints in Hara Tamiki's *Gulliver's Travels*) 岐阜大学地域科学部『岐阜大学地域科学部研究報告』22-23 号、2008 年。

<<http://hdl.handle.net/20.500.12099/22099>> (2021 年 11 月 21 日閲覧)

Crider, Richard. “Yahoo (Yahu): Notes on the Name of Swift’s Yahoos.”

<<https://ans-names.pitt.edu/ans/article/view/1351/1350>> (2021 年 11 月 30 日閲覧)